

モモの収穫後管理

県北農林事務所伊達農業普及所

JAふくしま未来伊達地区モモ生産部会

1 気象経過

伊達市梁川町（アメダス）における8月の平均気温は28.0℃で、平年より3.1℃高かった。また、この時期の降水量は118.5mmで、平年比82%であった。

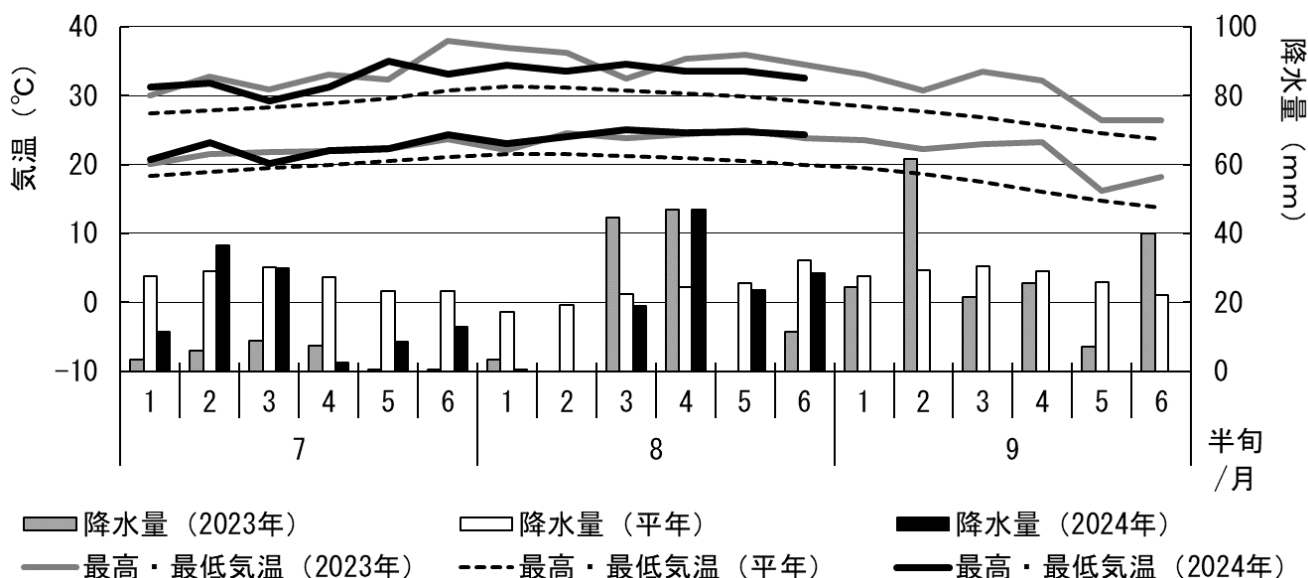


図1 気温と降水量の推移（観測地点：伊達市梁川町）

2 秋季せん定および縮・間伐

(1) 秋季せん定

ア 目的・効果

- ・樹冠内部にも薬液が届くようにして、秋期防除の効果を高める。
- ・樹冠内部にも日光が当たるようにして、骨格枝の基部付近に着生している中・短果枝まで花芽の充実を図る。
- ・休眠期のせん定量が少なくなる（弱せん定になる）ため、次年に発生する枝の勢いが抑えられ、優良な結果枝が確保しやすくなる。
- ・徒長枝が太くなる前にせん除することで、休眠期せん定における傷口が小さくなり、凍害や病原菌の感染リスクが減少する。特に若木では、主幹部にせん定痕の傷口数が多く、面積が大きいと、凍害などにより枯死する危険性が増す。
- ・樹勢の適正化により高品質果実の生産ができる

イ 時期

収穫が終了している早生～中生種に対しては、早生種から順に、9月上旬～中旬に実施する。

実施時期が早いと二次伸長が生じ、せん孔細菌病の感染リスクが増加する。逆に実施時期が遅いと、貯蔵養分が蓄積された枝を切り落とすことになるので適期に実施する。

ウ セン定の程度

樹勢が通常～強い場合は、**図2**に準じて実施する。主幹や主枝が葉の間から透けて見える程度まで実施し、過度に枝を切りすぎないように注意する。特に背面枝は、日焼け防止に必要な枝を適度に残す。

高温・乾燥などで樹勢が低下している樹や、せん孔細菌病などで落葉が多い樹では、実施しないか最小限度（樹冠内部に発生している長大な徒長枝を間引く程度）にとどめる。

エ 秋季せん定のポイント

- ・樹冠内部（主幹から半径2 mぐらい）の、骨格枝の背面や基部から発生している長大な徒長枝など、明らかに不要な枝を中心にせん除する。骨格枝の先端付近（全長の1/3程度）の徒長枝は、樹勢の維持に重要であるため、せん除しない（**図2**）。
- ・徒長枝や背面枝は基部葉を4～5枚程度残して、基部に副梢や小枝がある場合はそれらを残して、せん除する（**図4、5**）。
- ・切り口が大きい場合や、骨格枝に直接生じた切り口には、早めに癒合剤を塗布する。
- ・結果枝のせん定は、この時期には実施しない。
- ・せん定量は、樹冠下に20%ほどの透過光が届く程度にとどめる（**図3**）。

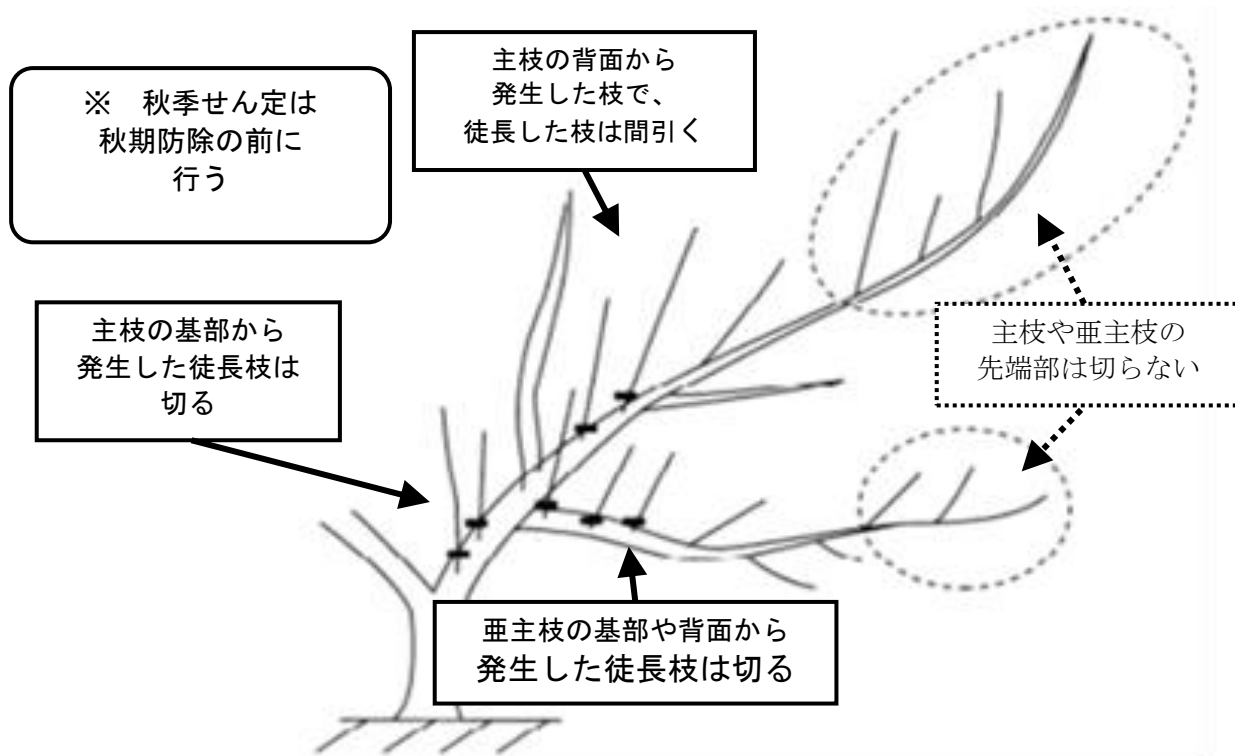


図2 秋季せん定の対象となる枝（—：せん除位置）

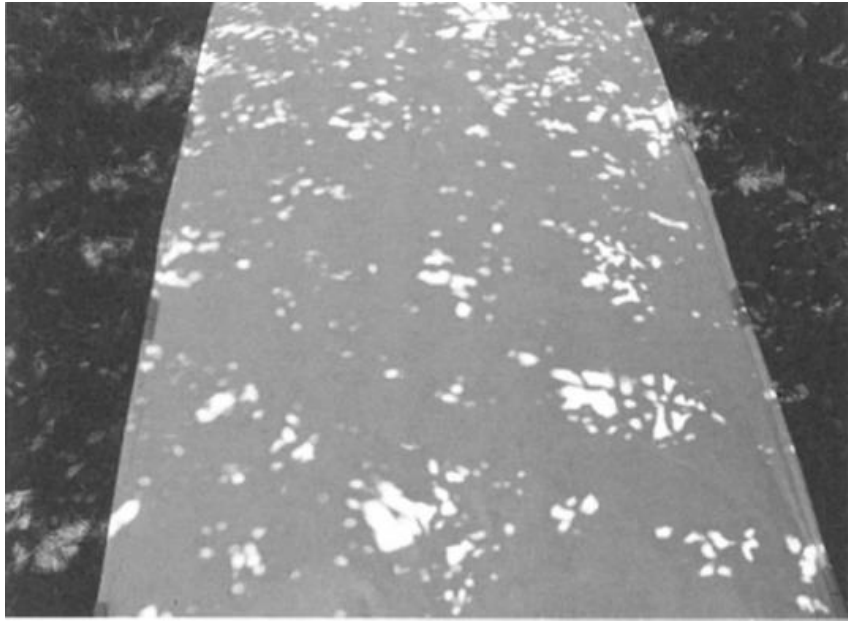
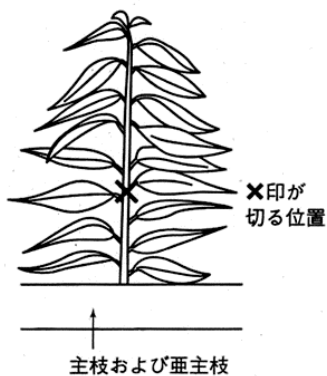
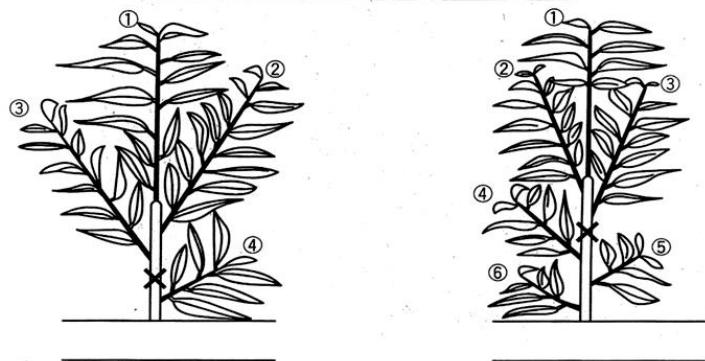


図3 適当な樹冠下の明るさ

A: 基部に小枝のない徒長枝の場合



B: 基部に副梢がある徒長枝の場合



夏の間の新梢の摘心などにより、副梢が発生している場合は、基部の副梢を残して切る。数多く残しても混み合うだけなので、15cm以下の短い枝(図中の④⑤⑥の枝)を残して、あとはせん除する

図4 副梢のない場合の切り方

図5 基部に副梢がある徒長枝の切り方

出典：「現代農業」より抜粋（元 J A ふくしま未来、藤島氏原図）

(2) 縮伐・間伐

植栽間隔が狭く、園地全体の採光性が低下したほ場では、縮伐や間伐を実施する。縮伐は秋季せん定と併せて9月上旬頃、間伐は収穫直後に行う。

採光性の低下は、果実品質の低下だけでなく、枯れこみなどの原因にもなる。枝の混雑が分かり易く、かつ、残った樹や枝が貯蔵養分を多く確保できるよう、秋季せん定と同様の時期に実施する。

2 施肥

(1) 礼肥

樹勢に応じて、礼肥の施用量を調節しましょう。

収穫後に低下した葉の光合成能力を回復させ、次年の生産に向けた樹勢の回復、花芽の充実および貯蔵養分の蓄積を図るため礼肥を施用する。

施用時期は早いほど吸収率は高いが、二次伸長を避けるため9月上旬頃に施用する。肥料は速効性のものを施用し、施肥量は、樹勢が弱い～標準の樹は、窒素成分で2～3kg/10aを目安とする。なお、凍霜害により着果が少ないなどして樹勢が著しく強い樹では、新梢の二次伸長を防ぐため礼肥は施用せず、元肥をやや早め（9月下旬頃）に施用する。

表1 施肥量を判断する樹相診断の基準

樹勢	葉色	徒長枝	新梢停止期	果実品質	その他
強い	濃い緑	多発	収穫期まで伸長が続く	低糖度、核割れ、着色不良	二次伸長
適正	中庸	10～20本	着色開始期に80～90%げ停止する	高品質、玉揃い良い	
弱い	薄い緑	少ない	早期に伸びが止まる	小玉	短果枝多

表2 礼肥の施用量の目安（10a当たり）

資材名	成分量 (N-P-K%)	施用量	窒素成分量
ノルチツソ	15.5-0-0	1/2袋 (10kg)	1.6kg
尿素	46-0-0	1/4袋 (5kg)	2.3kg
燦燦 (さんさん) あみの	8-6-7	1袋 (20kg)	1.5kg

(2) 基肥

葉の活力を維持し、貯蔵養分の蓄積を促進させるため、速効性肥料と緩効性肥料を組み合わせ、窒素成分で11～15kg/10aを9月～10月上旬頃に施用する（表3）。なお、礼肥を施用しなかった場合は、9月下旬頃に施用する。

表3 基肥の施用量の目安（10a当たり）

資材名	成分量 (N-P-K%)	施用量	窒素成分量
みらいろ物語 もも基肥	12-10-3	6袋 (120kg)	14.4kg
みらいエース	8-10-3	5袋 (100kg)	8.0kg
エスコン580 (エスコン化成)	15-8-10	1袋 (20kg)	3.0kg
			計 11.0kg

【施肥量の計算方法】

「窒素成分」÷窒素含有割合＝施肥量（kg/10a）」

（例）10 a の面積に、礼肥として窒素成分 2 kg を、「ノルチッソ」（窒素含有率 15.5%）で施肥する場合の量は？

「窒素成分 2 kg」÷「窒素含有率（15.5÷100）」≒「施肥量 12.9kg/10 a」

4 土壌管理

（1）かん水

土壌が乾燥すると光合成が停滞し貯蔵養分の蓄積が少なくなるので、かん水を実施する（表 4）。

表 4 生育ステージごとの土壌種類別のかん水間隔・量の目安（10 a 当たり）

	砂質土		壤土・火山灰土	
	かん水期間	かん水量	かん水期間	かん水量
養分蓄積期～落葉期	7日	10mm	10日	15mm

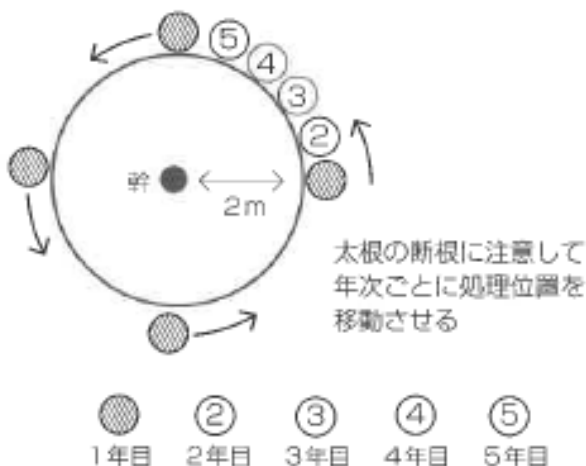
（2）深耕

高温・乾燥に強い樹づくりのため、深耕と有機物資材施用を行いましょう。

深耕を行うと、有効土層が深くなり根域が拡大するので、異常気象に対して抵抗力が強まり樹体の栄養状態が安定するため収量も増える。

イ 深耕の方法

深耕は様々な方法があるが、必要以上に根を傷つけないためには、タコツボ式が有効である。



1 樹に対して 5 年で 1 巡のように穴の位置を移動する。深さの目安は 50～80cm。掘り上げた土に堆肥などの有機資材 10～20kg/樹を混ぜて埋め戻す。

図 6 タコツボ深耕

5 モモせん孔細菌病の秋期防除

新梢葉での発病が増加しています。来年の春型枝病斑の発生を抑えるため、秋期防除を徹底しましょう。

春型枝病斑の原因は、前年の9月～落葉期における、新梢の落葉痕や皮目からの感染である。秋期防除はICボルドー412などの無機銅剤を用いて、春型枝病斑の基となる感染を防ぐために重要な防除である。

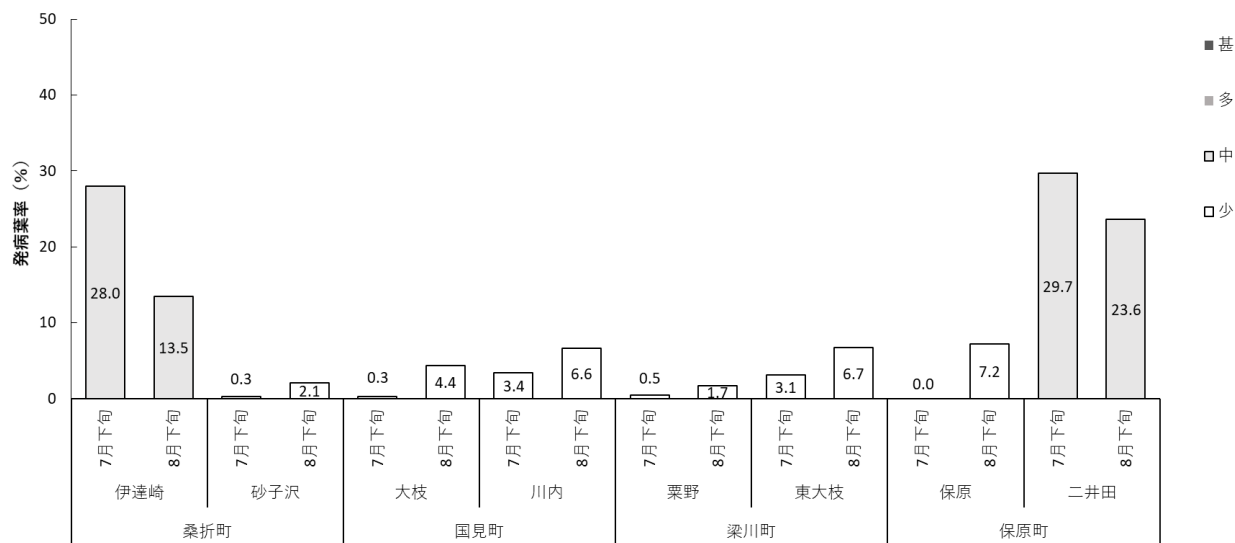


図7 せん孔細菌病の発生状況（7月下旬～8月下旬）

(1) 秋期防除の基準

無機銅剤の残効は通常は2週間程度なので、秋期防除は9月上旬頃を1回目として、2週間間隔で3回を基本とする。近年の気温上昇により落葉時期が遅い場合は、3回目防除の15日後に4回目の防除を実施する。

(2) 確実な防除効果を得るための注意点

防除したい枝に確実に薬液を到達させるため、秋期防除の前に秋季せん定を実施する。また、散布ムラをなくすために、薬剤散布量を400L/10aとする。

なお、感染予防のためには、雨前の防除が重要である。特に台風などの風雨によって感染が拡大することから、台風の接近やまとまった雨が予想される前に、計画的に防除を行う。

散布後に著しい降水があり、薬剤の付着量が減少した場合は、前回散布から2週間以内であっても、次の降雨前に前倒しで防除を実施する。

(3) 薬害の軽減

銅を含む剤は、モモの葉に一定度の薬害を生じるが、高温時や散布直後の降雨により薬害が拡大する恐れがあるため、散布日やその前後の気象状況に注意して実施する。

- ◎農作業事故に注意して作業を進めましょう！
- ◎農薬は、ラベルをよく確認して使用しましょう！
- ◎農薬散布後は、忘れずに防除日誌へ記帳しましょう！
- ◎農薬散布は、隣接する作物に飛散しないように注意しましょう！
- ◎適切な生産工程管理のためにGAPシートで確認しましょう！
- ◎気象災害に備えるため、収入保険への加入を検討しましょう！